

自らを律し、前進を

生物生産学部長 角田俊平

今、社会への門出にあたって、諸君の胸には「ヨシツ」という意気込みと、これまでの気儘だった生活から離れることへの不安が同時に渦巻いていることと思う。常に、初心を忘れることなく、社会人としての身の処し方を早く学んでいただきたい。



これからは、自分探しの旅、ぼんやりしている迷路をさまよいかねない。今後は、緊張した「出会いの場」が続くであろう。学生時代の温室をぬけ出し、社会人としての誇りと責任を感じ、消極、安易な道を求めず、失敗を恐れることなく、常に高い理想を追求する「志」、しなやかな柔軟性、あふれる意欲をもって、謙虚に、しかも勇敢にすべてのことにチャレンジして欲しい。過去を語らず、前向きに、夢を求めて突走ってこそ明日の糧を勝ちとることができるであろう。

「年年歳歳花相似 歳歳年年人不同」と中国の詩人は詠んでいる。花は毎年同じように咲くが、人は年とともにうつり変わることに嘆きであろう。しかし、うつろいやすい人の世であるからこそ、逆に、今を生きることの尊さがあるとも言える。

来る人があれば、去る人もいる。世の中は持ち回りの順ぐり、やがて来る時代を担うのは間違いなく君達である。その新鮮な意欲と行動力に期待して諸君を見送り、私もまた大学を去る。「人心如海水 世路有風波」再会の日のあることを願い、諸君のご健勝と活躍を切望する。

運・根・鈍の説

学生部長 三好信浩

本学の前身校のひとつである広島高等師範学校の「校友会々誌」第二十六号（一九一四年刊）に、赤木万次郎教授の書いた「運・根・鈍の説」と題する長文の論説が載っている。赤木教授は、東京高師の出身であるが、広島高師の初代校長北条時敬に迎えられて学生指導の責任者となり、「堅実主義」という独自の校風づくりに努力して同校の発展に貢献した人物である。今日でも、広島大学といえば、この堅実さのイメージを重ね合わせる人が多いのは、その影響である。



本学の出身者である自身の体験からいえば、戦後の広島大学は、世にいういわゆる有名大学の部類に加えられることが多い。そうであれば、甘い期待を捨てて、根と鈍をもって地道な努力を積み重ねて、運をわが身によび込むのが賢明であろう。

私は、「卒業」という言葉を好まない。人間がその業を卒（お）えるのは、棺を蓋（おお）うときである。それまでは、生涯にわたる自己学習の行程であって、言うところの卒業は、その行程への「出発」であるという意味から、めでたいのである。

激動の予想される二十一世紀に生きるためには、国際的な行動力とか独創的な発想力など、新たな能力が求められるであろうことを百も承知のうえで、あえて運・根・鈍の説を持ち出すのは、そこに生涯学習の極意が秘められていると感じるからである。諸君の出発を祝福したい。